

## 巻頭言

教育活動全体の中で、数学教育は如何なる役割りを果たすべきものだろうか。教育の中に数学がとりあげられている現在、数学教育を担当している我々にとって、これについての見識を確立することは、重大な果題であります。

大学に入学して数学を専攻している学生から、次の様な意見を聞かされることがよくあります。

「小・中・高の頃習った算数・数学は、答案作成の為の技術であり、計算の為の計算、証明の為の証明に過ぎず、余り意義のあるものとは思えなかった。大学に来てその片鱗に接した本當の数学というのは、もっと次元の異なるものの様な気がする。こういう、数学の本質に触れられる様な教育が、小・中・高の段階でできないものなのだろうか。」  
誠に痛烈な批判です。

数学という学問が発生しなければならなかった必然性、具体を離れて抽象的論理体系へと発展せざるを得なかった背景、こぼれと記号の遊戯の如き観を呈する様になった数学が、人間の文化生活を合理的にしろも優稚にするのに与って欠けに力を貸しているという現実を知る時、数学教育にたいすさわる我々も、自らの使命の重さを感じる者です。どの様な素材を如何なる姿で児童生徒に与えれば、眞の数学の味を味わい、その活用を意欲的な人間を育て得るか否、我々は絶えず追求してゆかねばならないと思います。数学の本質、数学の楽しさ、そして数学の有用性を次代に伝えるには、単に小手先の技能のみをつかかせるだけでは不十分です。具臍をつきぬゆほなりません。この動きが、古くは今世紀初頭の数学教育改良運動であり、新しくは戦後の現代化運動なるでしょう。ここは我々の心すべきこと、徒らに表面的な動向に惑わされることなく、自らの所信を確立し、地についた研究を進めぬはならぬということでしょう。

かかる目的の下に本会が発足してここに5年、数学史の探究に、教材の研究に、着々と実をあげていることを思い、将来の発展を期したいと存じます。  
(久米)

1974年3月